



銀行簿記学の伝播と継受（1）：謝霖・孟森編著『銀行簿記學』の勘定科目表と借貸の理を中心に

著者	小林 正典
雑誌名	和光経済
巻	52
号	2
ページ	43-65
発行年	2020-02
URL	http://id.nii.ac.jp/1073/00004769/

〈研究ノート〉

銀行簿記学の伝播と継受 (1)

—謝霖・孟森編著『銀行簿記學』の勘定科目表と借貸の理を中心に—

Account Charts and Principle of Bank Bookkeeping Science Introduced by Lin Xie and Sen Meng

小林 正典

Masanori Kobayashi

【Abstract】

This paper presents a study of the account charts and the principle of Bank Bookkeeping by Lin Xie and Sen Meng, which introduced double-entry bookkeeping and illustrated the application of the method to the banking industry. Lin Xie and Sen Meng wrote that book consulting some Japanese bank bookkeeping textbooks by Itsutaro Morikawa and others, working around the difficult principle of bank bookkeeping science and the difference of Chinese character.

【キーワード】

銀行簿記, 複式記帳法, 勘定科目表, 清末留学生

はじめに

阿片戦争の後、南京条約（1842年）が締結されると清の鎖国は崩壊に進み、いわゆる洋務運動を経て様々な欧米の文明が中国にもたらされることとなる。清仏戦争（1884～85年）、日清戦争（1894～95年）の敗戦を経ると、近代化が先行する日本に留学する知識人が急増し、20世紀に入ると、中国人の手によって複式記帳方法の文献も刊行されるようになった。その最初のものが蔡錫勇の『連環帳譜』であり、次に謝霖と孟森の共著による『銀行簿記學』とされている。前者は中国の伝統的な記帳方法との融合が図られたものであるのに対し、後者は横書きの仕訳で借方、貸方の名称を用い、アラビア数字を用いる等の点で本格的に西洋の複式記帳方法を紹介するものである。

その意義については、中国の会計史に関する各種文献で高く評価されているものの、歴史的事実を簡単に紹介するだけのものが大半であり、内容に関して詳細に考察を行った文献は数少ない。とりわけ、底本となる森川鑑太郎の銀行簿記学に関しては記述を欠くものが多く、記述があっても簡単に紹介するにとどまり、双方の内容を比較検討した研究は現状のところ確認することができない。

そこで本稿では、謝霖と孟森の編著『銀行簿記學』とその底本といわれる森川の銀行簿記学の文献を比較し、特に勘定科目表と「借貸の理」に焦点を当てて、本格的な西洋の複式記帳法が清朝末期にどう伝えられたのかを考察する。

1. 謝霖・孟森編著『銀行簿記學』について

1.1. 謝霖と孟森

1.1.1 清朝末期の日本留学ブーム

本稿で取り上げる『銀行簿記學¹⁾』の編著者は、清朝末期に日本に留学した謝霖と孟森²⁾である。清朝末期の頃、謝霖と孟森のような留学生が数多く日本に来ていた。日本への留学が一つのブームになった背景として実藤恵秀は、本家本元の西欧で精密なことを学ぶよりも必要のないことを切り捨てている日本の学問を学んだ方が簡便で有利と考えたこと、両国ともに漢字という共通の文字を用いていること、距離の近さと費用の安さ、これらを理由に挙げている³⁾。費用については、当時、欧米の大学の学費が月額20銀両であったのに対し、早稲田大学の1年間の学費が17銀両と格安であった。また、日本では実用的な知識が短期間で得られ、帰国した後も積極的に登用されたこと等も青年知識人の日本留学を誘引した理由と考えられる⁴⁾。実藤の考察によると、1905(明治38)年から翌年にかけて清からの留学生の数が最高に達したようであるが⁵⁾、謝霖と孟森が日本に留学したのもまさにこの頃であった。

明治期は「簿記に関する書物が多く出版され、簿記教育の必要性が教育法令などにおいて初等教育をはじめとして認められ、現代とは異なり、国をあげて簿記教育が盛んに行われていた⁶⁾」が、謝霖と孟森も簿記の会に参加しており、そこでの活動が中国に西洋式の複式記帳法⁷⁾を伝播する先駆となる『銀行簿記學』を生み出すに至ったと考えられる。

日本留学から帰国した後、歴史に名を刻む者は数多くいるが、謝霖と孟森も功績を残して著名な人物となった。ただし、謝霖は近代会計研究の第一人者であると同時に中国最初の公認会計士、中国最初の会計事務所(正則会計事務所)の経営者として知られ、孟森は明清断代史の礎を創成するとともに社会風俗の研究でも著名というように、両者の経歴と研究業績は大きく異なっている。

1.1.2 謝霖について

1885年に山東で生まれた謝霖は、字を霖甫又は麟甫といい、本籍を江蘇常州におく。謝霖は1905(明治38、光緒31)年に日本の明治大学に留学して商学を専攻し、1907(明治40)年に孟森と編著の形で『銀行簿記學』を日本の東京で出版した旨が1992年復刻版の「總序」に記されているが、これが1905年に中国の湖北官書局から刊行された蔡錫勇の『連環帳譜⁸⁾』に続き中国で2番目に複式記帳法を導入した文献であり、本格的に西洋式の複式記帳法を紹介した簿記書としては中国で最初のものとなった。謝霖は1909(明治42)年に帰国した後、大清銀行の役職等多くの要職に就き、1918年9月に農商部が会計師暫行章程を公布すると、謝霖に第一号の会計師証書が発行されている⁹⁾。謝霖は『銀行簿記學』の他に多くの会計書を刊行しており、中国の近代会計史を語る上で欠かせない人物であるが、1949年、革命政権によって新中国が建国されて以降はその経歴が災いし、不遇の中、文化大革命期の1969年に没している。

なお、改革開放以降、謝霖は中国で再び評価されるようになり、現在は彼の功績を紹介する文献が多々ある。しかしながら、『銀行簿記學』が森川鎰太郎等の日本の文献に依拠して生み出された経緯については、そのことを断片的に紹介する文献はあるにせよ、内容にまで踏み込んで考察を加えたものは確認できない。

1.1.3 孟森について

一方の孟森であるが、『銀行簿記學』の「敍」(序文)の末尾に「陽湖孟森」と記されている。このことから孟森は、1868年(1869年生まれとの記録もある)に江蘇常州の陽湖県に生まれ(後に武進県に入り、字は蓴孫、号を心史という)、1938年に没するまでに明清代の歴史研究の他、数多くの業績を遺した人物であることが分かる。『銀行簿記學』を紹介する文献で孟森は簡潔に紹介されるにとどまるが、若くして碩学の誉高い人物であった¹⁰⁾。留学先の法政大学で法学と政治学を学び、同時に経済分野の研究にも力を注ぎ、

帰国後は、清朝末期の憲政運動に参加し、上記以外にも様々な研究成果¹¹⁾を残しているが、紙面の関係で詳細は他稿に譲ることとする。

なお、1992年復刻版の扉の2枚目には、縦書きで「江蘇 孟森 謝霖 編纂」とあり、編者名は右側に「孟森」、左側に「謝霖」で表紙と逆の並びになっている¹²⁾。孟森の名が右から左に移った理由は定かでないが、謝霖とは江蘇常州人という共通点があり、謝霖の来日時¹³⁾の年齢が20歳程度であるのに対し、孟森はすでに30歳代の半ばであった。『銀行簿記學』の出版には、学識を有する年長の孟森の助言が少なくなかったであろうと推測される。

1.2. 『銀行簿記學』の概要

『銀行簿記學』の概要については、序文と目次が参考になる。まず序文の末尾には「光緒三十二年十月、陽湖孟森叙於日本江戸集賢館腐樓」(『銀行簿記學』叙6頁)と記されていることから、これは、孟森が1906(明治39)年10月に東京で記したものと考えられるが、謝霖と孟森の分担については、「本書脱稿。其製簿檢數。皆麟甫爲之。不佞特譯述其理論云」(同上)と記されるだけである。

つまり、原稿を書き上げ、帳簿を作って数字を点検するのは全て謝霖が行い、「不佞」(拙者)すなわち孟森は理論の記述を担当したということである。理論がどの箇所を指すのかは定かでないが、理論的記述は『銀行簿記學』の全体に及ぶので、孟森の記述は必ずしも一部に限定されないものと推測される。

次に『銀行簿記學』の概要と趣旨についてであるが、同書の凡例の記述が参考になる。冒頭の部分では、参考文献とその著者等について、「是書理論。用森川鑑太郎所著之銀行簿記學。不遺一字。其事實難明之處。稍加按語。餘不敢增損毫末」(『銀行簿記學』凡例1頁)と記されている。

つまり、本書の理論は森川¹³⁾が著述した銀行簿記學を一字も遺さず用いたものであり、理解しにくい所には少々「按語」(注解)を加えたものの、加筆削除はしなかったということであるが、翻訳

本でない¹⁴⁾ことは、続きの文章「所製帳簿。從原圭南指用早稻田商科所定之式」(同上)から判明する。要するに、調整された帳簿は、原圭南の指導に基づき早稻田商科が定めた様式を用いたということである。なお、原圭南については、序文の終段の記述¹⁵⁾から、謝霖と孟森が会員であった「正則」という簿記の会¹⁶⁾の会長であったこと、当時は大阪高等商業の教頭であった旨が記されている。

また凡例には、米田喜作に関して「又簿式亦間參米田喜作所著簿記學本。米田本爲銀行班講師所用之課本」(同上)と記述されている。帳簿の様式は、時折、米田喜作が著述した簿記學本も参考にしたとの意であるが、この米田本は、銀行班の講師が用いていたテキストということである。テキストの内容は、「理論太簡。記帳止兩月。遠不逮森川之詳備」(同上)と評されているが、森川の文献に比べて理論は簡素で、記帳も少ないコンパクトなものであったことが推測される。

ところで、中国会計学界の重鎮である郭道揚は、2009年復刻版の「前言」(前書き)で以上の点に関し次のように紹介している。

《銀行簿記學》之基本理論，系以日本學者森川鑑太郎所著之《銀行簿記學》爲藍本，書中所用帳簿格式，又借鑑於早稻田大學商科所定之新式帳簿。此外，在編譯之際，又參見米田喜（原文のまま）所著《簿記學講義》¹⁷⁾。

郭道揚は、森川が著述した文献の書名を『銀行簿記學』と題してこれを底本(藍本)と考え、米田の文献の書名についても『簿記學講義』と記述している。森川の著作としては、1898(明治31)年に同文館から出版された『應用銀行簿記學¹⁸⁾』があるが、これは1900(明治33)年の4版から書名が『修正銀行簿記學¹⁹⁾』に改められている。同書は1905(明治38)年の11版まで確認できるが、1906(明治39)年になると、森川は『修正簿記學』を引き継ぎながら実践的な項目を加筆して書名を変更した『銀行簿記教科書²⁰⁾』を同文館から出版している。また、米田の著作²¹⁾とし

ては『実践銀行簿記法』が1904（明治37）年4月に立花寛蔵（大倉高等商業学校初代校長）校閲の形で三省堂から出版されており、同修正2版が1907（明治40）年6月に刊行されているが、『簿記学講義』とは書名が異なっている。また、清朝末期（1910年）に奉天編譯處の翻訳本が刊行されているが、こちらも書名が『實用銀行簿記』になっていて『簿記学講義』とは異なる。

謝霖と孟森の『銀行簿記學』がどのような文献を参照したのかについては、森川と米田の著作及び原の指導に基づく早稲田商科の様式とを詳細に照らし合わせてみる必要があるが、既述の通り、理論については森川が著述した銀行簿記学を一字も遺さず用いたとあるので、次節では森川の『應用銀行簿記學』、『修正銀行簿記學』、『銀行簿記教科書』の記述を手掛かりに、底本がどれかを探ることとする。

1.3. 『銀行簿記學』の構成

謝霖と孟森の『銀行簿記學』が、当時すでに多くの銀行簿記に関する文献が出版されていた中で、なぜ森川の銀行簿記学の文献に依拠したのかは定かでないが、本国で創設された銀行に寄与することを構想していたとすれば、実務にすぐ役立つ文献を探していたはずである。日本の銀行制度の創設にあたって大いに寄与した、1873（明治6）年大蔵省公刊のアラン・シャンド（Alexander Allan Shand）講述の『銀行簿記精法』は、「銀行実務に直ちに採用することを前提とした実務手引書として、必要な帳簿の雛形や記入方法とともに、銀行の業務システムについても解説している²²⁾」。とはいえ、「一般の定石的な簿記の『テキスト』とは大いに趣を異に²³⁾」するがゆえに、銀行簿記の初心者教科書としては使いにくいものである。これに対して、森川の文献は、理論を盛り込みながら初心者向けに実務手引の教材として使用できるものであり、謝霖と孟森がこの利点に着眼した可能性は高いと思われる。

なお、『修正銀行簿記學』11版の奥付を見ると、1898（明治31）年11月5日に初版の『應用銀行簿記學』が「定價金九拾錢」で発行されてから

1905（明治38）年2月18日の11版が「定價金壹圓」で出版されるまでわずか6年余りしか経っていない。売れ行きの良否を判断しうる確実な資料はないものの、『應用銀行簿記學』の初版が出版された時期にすでに出版されていた大原久信の『改良新式銀行簿記教科書』（私立東京簿記精修學館出版）は、初版が1892（明治25）年3月30日に出版され、それから1902（明治35）年2月20日の6版発行までに10年近く経っている。『應用銀行簿記學』の初版と同年の6月13日に出版された勝村榮之助の『銀行會社簿記學原理』（萬松閣出版）については、2版が1901（明治34）年10月6日に出るまで3年近くかかっている。印刷部数が判明しないので推測にすぎないが、少なくとも森川の『應用銀行簿記學』及び『修正銀行簿記學』の売れ行きが好調だったことが読み取れる。このことも謝霖と孟森が森川の文献に着眼した要因の一つとして考えられるのではなかろうか。

さらに、森川のこれらの書籍を出版した同文館の社名「同文」には、文字を同じくするという意義がある。同文館といえば清朝末期の洋務運動期に成立した清朝官立の外国語学校「同文館（京師同文館）」や東亜同文会が実学を重視して1901（明治34）年に上海に設立した「東亜同文書院」を想起させるほど、清朝末期の留学生には認知されやすい名称である²⁴⁾。

ちなみに、1890（明治23）年8月に発布された銀行条例は、商法実施の延期にともないその実施を延期されていたが、1893（明治26）年7月1日に商法の一部「会社編」が実施され、銀行条例も同日から実施された。これに従って、同年5月に銀行条例施行細則が発布され、銀行設立の手続・銀行の営業内容・諸報告書・銀行検査の内容等を規定するとともに、その附属雛形では大蔵大臣に提出する営業報告書および貸借対照表・損益表・財産目録の様式が定められた。その後、1899（明治32）年6月8日の大蔵省令第23号および翌年3月12日の大蔵省令第3号をもって、それぞれ銀行条例施行細則の一部が改正されている²⁵⁾。森川の『應用銀行簿記學』は1900（明治33）年2月25日に訂正3版が出たものの、まも

なく同年5月15日には4版が発行され、書名も『修正銀行簿記學』に改められているが、その要因として同年の大蔵省令第3号による銀行条例施行細則の一部改正が関係するものと考えられる。

『應用銀行簿記學』と『修正銀行簿記學』には記述内容に違いがあるものの、目次²⁶⁾については11版まで変わりはない。また、謝霖と孟森の『銀行簿記學』の目次²⁷⁾については、1992年復刻版を見る限り、『應用銀行簿記學』及び『修正銀行簿記學』の目次と合致しているが、「第八章實踐」の「第四分配利益」と末尾の「帳簿」の本文は欠落している。そのためか、2009年復刻版では、目次からも「第四分配利益」と「帳簿」が省かれている。

はたして『銀行簿記學』は、内容的に『應用銀行簿記學』と『修正銀行簿記學』のいずれを底本とするのであろうか。孟森の日本留学期間には諸説あり、何度か日本と中国を往来している可能性があるが²⁸⁾、1906(明治39)年4月から翌年4月の間は確実に日本に滞在していたようである²⁹⁾。既述の通り、『銀行簿記學』の序文で孟森が1906(明治39)年10月に東京の集賢館で執筆したことが記されており、1905(明治38)年に出版された『修正銀行簿記學』の11版が最も近い時期のものである。日本の最新の事情を学びに清朝から来た留学生であれば、最も新しい文献を基にして執筆したと推定するのが合理的である。邵藍蘭も先行研究において「森川鑑太郎著わす所の銀行簿記學」を『修正銀行簿記學』の11版と推定している³⁰⁾。

ところで、1906(明治39)年4月5日には、森川の『銀行簿記教科書』が出版されている。その目次³¹⁾を見ると『修正銀行簿記學』の内容を引き継ぎつつも実践的な項目を盛り込むべく、銀行實務に関する「第十章切手手形の交換、第十一章決算の順序并に書類、第十二章主簿者の心得」を追加している。「緒言」では「學術と實地とをして接近せしめ、實業學校をして、其目的を達せしむる唯一の良法たるを失はざるべし。是れ此著ある所以なり」(『銀行簿記教科書』緒言1頁)と明記していることからして、『銀行簿記教科書』

は『修正銀行簿記學』を基礎としつつ、当時の言葉を借りると「實地應用」、すなわち實務への応用に傾斜して内容を大幅に改編したものといえよう。『銀行簿記學』の目次は『銀行簿記教科書』と異なるものの、出版の時期については『銀行簿記教科書』と近接するので、結局、「森川鑑太郎著わす所の銀行簿記學」がどの文献に相当するのかを突き止めるには、各文献の記述内容と比較して考察する必要がある。

2. 銀行の業務

2.1. 銀行の定義

『應用銀行簿記學』から『修正銀行簿記學』に書名が改められた1900(明治33)年に、既述の通り大蔵省令第3号による銀行条例施行細則の一部改正があった。この点に鑑みて、『修正銀行簿記學』を執筆する際に改正部分を加筆修正した可能性が高い。実際のところ、『修正銀行簿記學』の冒頭部分にくる「第壹章銀行の業務」の記載内容に着目すると、『修正銀行簿記學』の中で銀行の定義が修正されている。『應用銀行簿記學』の初版に記載された銀行の定義は、以下のように記されていた。

銀行は金錢の取扱を專務とし、供給ある處に之れを集めて需要ある處に之れを散し、以て金融の疎通を計り、其間に自家の利益を収むる機關なり、されば銀行業は商品なる目的物ありて始めて商業の成立するが如く、金錢なる目的物ありて始めて成立するを得べく、又金錢以外に關係すべからざる特性を有するものなりとす、其理を詳述するは本書の目的にあらざるも、要するに其本領を脱して不熟練なる他業に關係するは極めて危険の業なるを以てなり、是れ我國立銀行が其第五十三條及五十四條に於て(『應用銀行簿記學』1頁)、(以下略)

森川は、『應用銀行簿記學』、『修正銀行簿記學』の記述で、白丸「○」、黒丸「●」、ゴマ「ゝ」の圈点、傍点を使用している。その使い分けの基準

は示していないものの、いずれも重要な箇所、強調する箇所に付していると解される。そして、上記『應用銀行簿記學』初版の記述箇所を4版にあたる『修正銀行簿記學』のそれと比較すると、以下の通り部分的に記述が改められている(4版以降は11版まで記述内容の変更はない。)

銀行は金銭の取扱を専務とし、供給ある處に之れを集めて需要ある處に之れを散し、以て金融の疎通を計るの機關なりされば銀行業は商品なる目的物ありて始めて商業の成立するが如く、金銭なる目的物ありて始めて成立するを得べく、又他の事業に關係すべからざる特性を有するものなりとす、其理を詳述するは本書の目的にあらざるも、要するに其本領を脱して不熟練なる他業に關係するは、極めて危険のを(こと)³²⁾なるを以てなり、是れ我舊國立銀行條例が其第五十三條及五十四條に於て(『修正銀行簿記學』1頁)(以下略)

白丸「○」が黒丸「●」になった理由は定かでないが、『應用銀行簿記學』で「以て金融の疎通を計り、其間に自家の利益を収むる機關なり」、「又金銭以外に關係すべからざる特性を有するものなりとす」、「我國立銀行が」と記されていた箇所が、4版の『修正銀行簿記學』からは「以て金融の疎通を計るの機關なり」、「又他の事業に關係すべからざる特性を有するものなりとす」、「我舊國立銀行條例が」という表現に書き換えられている。『修正銀行簿記學』11版もこの定義を踏襲しており、この部分について謝霖と孟森の『銀行簿記學』では以下のように訳されている。

銀行者。專以處理金銭爲務。由供給之處集之。而散諸需要之處。所以疏通金融之機關也。金融二字吾國謂之銀根然意義不及金融之圓到(下線は小林による)銀行業者。以金銭爲成立之目的物。猶之商業成立。以商品爲目的物也。又有與他事業不相關係之特性。欲詳其理。非本書宗旨。要而言之。非其本務。必不熟練。妄與金銭生關係。極為危險。是以日本國立銀行條例第

五十三四等條(『銀行簿記學』1頁)

下線(線引きは小林による)の部分は、謝霖と孟森が縦書きの本文1行中に小さな号数の活字で2行分を挿入した「按語」(注解)である。日本語の「金融」という用語が漢語の「銀根」(貨幣の流通)に相当し、漢語の「金融」と異なる点を指摘する。この注記を省いて記述内容を比較すると、『應用銀行簿記學』の「其間に自家の利益を収むる機關なり」、「又金銭以外に」に相当する文言は、『銀行簿記學』の記述にはない。『修正銀行簿記學』で「我舊國立銀行條例が」の文言が『銀行簿記學』では「日本國立銀行條例」と訳されているものの、全体を比較すると、『銀行簿記學』における銀行の定義は、『應用銀行簿記學』ではなく『修正銀行簿記學』に依拠するものであることが分かる。

2.2. 銀行の目的物たる金銭と取引先

『修正銀行簿記學』では、銀行における金銭と取引先の特質について以下の通り記述している。

而して銀行の目的物たる金銭なるものは經濟界に於て欠くべからざる媒介物なるを以て、其關係するところ極めて廣く、其業の何たるを問はず、何れも之れが媒介を待ちて始めて其業を營むを得るものなれば、其金銭を取扱ふ銀行の取引先なるもの、亦極めて廣く且多きは自然の數なりとす(『修正銀行簿記學』2頁)

『應用銀行簿記學』の「金銭なるものは」との記述部分が、『修正銀行簿記學』では「銀行の目的物たる金銭なるものは」に加筆されている。その他の部分は、『應用銀行簿記學』の記述と同じである。「目的物」というのは、ある行為の対象となるものを意味し、ここでは銀行業務における金銭を対象とすることは明らかであるが、一般的な意味での「金銭」との違いを明確にするために、あえて「銀行の目的物」という文言を加筆したものと推測される。また「自然の數」とは、自然のなりゆきという意味である。そして『銀行簿記

學』では、以下の通り金銭と取引先の特質について、『修正銀行簿記學』の原文に沿って訳している。

金銭爲銀行之目的物。此物實爲經濟界不可少之媒介物。其關係之處極廣。不問何業。皆待此媒介而後可營。故處理金銭之銀行。其主顧之既廣且多。實爲自然之數也（『銀行簿記學』2頁）

日本語の「取引先」という言葉はそのまま漢語では通じないため、続けて「主顧二字日文謂之取引先按之吾國主顧之稱名義恰合」（主顧の2文字は日本語でいう取引先である。これによりわが国の主顧という名称が符合する）との注記が付され、当てはまる漢語として「主顧」を用いている。さらに銀行の役割について、『修正銀行簿記學』に以下のような説明がある。

又銀行の取扱ふところのものは、均しく金銭なりとするも、供給ある處に之れを集めて需要ある處に之れを散するにあれば、其金銭の性質自ら異らざるを得ず、即集むるところのものは、之れを諸預り金とし、散するところのものは、之れを諸貸付金とし、其他甲地に集めて乙地に散するものあり、之を爲替とし、此等の取扱より生じて銀行の収益に歸すべきものには、利息割引料、手数料、等あり（『修正銀行簿記學』2頁）

この部分について、『銀行簿記學』では以下の通りに訳している。

銀行所處理者。雖同此一金銭。然有集散。性質不得不因之有異。其集也謂之諸存款金。其散也謂之諸貸付金。其他集之於甲地而散之於乙地者。謂之滙兌。由此等處理所生之利益。則利息也。（『銀行簿記學』2頁）

冒頭部分は「銀行所處理者。雖同此一金銭。然有集散。性質不得不因之有異」（銀行が取り扱うところのものは同じ金銭であるとはいえ、集と散

があり、性質はこれにより異ならざるを得ない）と意識になっているが、その他の部分は原文に沿って訳している。なお、「諸貸付金」、「利息」はそのまの漢字を使い、「預り金」は「諸存款金」と訳し、「爲替」は古くから中国で使われてきた「滙兌」を用いている。「割引料」には「貼現」、「手数料」には「費手金」を当て、「等」の箇所は「其他雜益」と補っている。ここで「割引料」と「手数料」は、漢語に該当する言葉がないことから、文中に以下の注記（下線部分、線引きは小林による）が考案されている。

貼現也。未到期之的款向銀行先期指款取用現金計先期若干日按日扣金若干日文謂之割引割者折扣之意引則取引之通稱易以貼現二字雖意不十分圓滿而大旨尚合 費手金也。日文謂之手數料吾國代客買賣之牙行有經手名目意義正合 其他雜益也（『銀行簿記學』2頁）

前半の注記では、「期限未到来の現金等価物で、銀行にあらかじめこれに依って現金を手に入れて使う旨を示し、事前に何日かを計算し、日数を基に金額をいくらか差し引くことを日本語で割引という。割とは金額を差し引くの意、引とは取引の通称、簡単に貼現の2文字とする。意味は十分に満たすものではないが、だいたい合致する」と述べられている。後半の注記では、「費手金」が委託売買の「牙行」すなわち仲買人の取扱いの名目であり、「手数料」と意味が合うとする。

なお、本章の最後の段で『修正銀行簿記學』は、銀行條例第1條「公ニ開キタル店舗ニ於テ營業トシテ、證券ノ割引ヲ爲シ又ハ爲替事業ヲ爲シ又ハ諸預リ及貸付ヲ併セ爲スモノハ何等ノ名稱ヲ用フルニ拘ラズ總テ銀行トス」を引用し、「是れ上記の數項を概括したるものに外ならざるなり」と付記して、末尾に「銀行の取扱ふ目的物」を図示³³⁾している（図表1）。『應用銀行簿記學』の図表では、「供給者」「需要者」をまとめて「需要者供給者」とし、「其他一般人」の記載はない。『銀行簿記學』では『修正銀行簿記學』の図表をそのまま借用し、文言を漢語に訳したものを掲載している。

図表1 銀行目的物に関する表示の比較

銀行の取扱ふ 目的物－金銭	集むる 金銭	諸預金	供給者	商人 運送業者 保険業者 倉庫業者 其他一般人 等	収益	利息 割引料 手数料 等
		爲替金				
	散する 金銭	諸貸付金	需要者			
		爲替金				

(出典)『修正銀行簿記學』3頁。

銀行目的物 －金銭	所集	諸存款	供給者	商人 運送業 保險業 堆棧業 其他一般人 等	収益	利息 貼現 滙費 雜益
		滙兌款				
	所散	諸貸款	需要者			
		滙兌款				

(出典)『銀行簿記學』3頁。

以上、銀行の業務に関する記述を中心に、『銀行簿記學』の内容を『應用銀行簿記學』、『修正銀行簿記學』のそれと比較しながら若干の考察を行った。その結果、謝霖と孟森の『銀行簿記學』の冒頭部分は、『應用銀行簿記學』ではなく『修正銀行簿記學』に依拠して執筆していることが明らかになった。『銀行簿記學』の出版時期は『修正銀行簿記學』の11版の刊行後間もないことから、本稿で『銀行簿記學』と森川の文献を対比する場合、基本的に『修正銀行簿記學』の11版に基づいて対比することとする。

3. 取引の分類と勘定科目表

3.1. 取引の分類と勘定科目

本章では、『銀行簿記學』における「取引の分類と勘定科目表」について、『修正銀行簿記學』の記述と比較し、若干の考察を加えることとする。まず『銀行簿記學』では、第二章「取引之分類並款項名目」の次に、原文にはない以下のような注記がある。

取引猶言交易買賣但非交易買賣字面之意茲竟改爲交易或買賣則銀行並無交易買賣之事實東籍頗行此二字大概已入人心姑仍之俟有的當名詞再行訂正款目字日文稱勘定科目日語凡開帳皆稱勘定有開列款項之意活用則開列可稱勘定惟呆用者究

多改從中文而誌其意味於此（『銀行簿記學』3頁）

漢語にない「取引」という言葉は「交易売買」のことであるが、銀行には「交易売買」がない。よって、「交易」又は「売買」としているが、「東籍³⁴⁾」でこの2文字が広まっている点を勘案し、「取引」の言葉をそのまま使用したようである。一方、「勘定」という言葉については、漢語の中からこれに相当する「款項」の言葉を用い、「勘定科目」を「款項名目」と訳したとのことである³⁵⁾。

以上の点を記した上で、『銀行簿記學』では『修正銀行簿記學』の本文をそのまま引用して訳しているが、重要な記述が含まれているので、まず『修正銀行簿記學』の該当箇所を確認する。

凡そ其業の何たるを問はず、之れを整理するに、最必要なるは、正格なる帳簿にして、之れに由るにあらざれば、借貸上如何なる位置に立てるやも知るに由なく、將た由りて来る損益の景況をも知るに途なし、されど帳簿の正格を期する事たる、漫然之を成し得べきにあらず、注意すべき事項極めて多しと雖も、先づ業務の性質により、參酌加減して各種の取引を幾多の項目に分類し、之れに由りて、錯雜せる、取引を整理し、一目瞭然たらしむるに在り、其分類せる項

目は、之れを勘定科目と云ひ、各種取引を代表せしむるを常とす(『修正銀行簿記學』4頁)

欄外には、「正格なる會計帳簿」という表題が記されており、正確な會計帳簿を作成するために、勘定科目を用いて複雑な取引を分類することの重要性が述べられている。この部分を『銀行簿記學』では部分的に文章を作り変え、注記(下線部分、線引きは小林による)を付して以下の通りまとめている。

無論何業。欲整理之。最必要者正式之帳簿也³⁶⁾。苟無此物。何由知借貸之位置。借貸即付與收然不能竟改付與收已見後論不再贅釋 更何由知以後所生損益之狀況。夫然。故欲求帳簿之正式。非可漫然得之。應究心之事極夥。惟其夥也。先從業務性質。確覈核其取引款目。可分幾類。以此整理錯雜之取引。使之一目瞭然。則此章之意也(『銀行簿記學』3頁)

正確な會計帳簿を作成するために、勘定科目を用いて複雑な取引を分類することの意義が、清朝末期において伝播されたことは画期的なことである。また、「借貸」という言葉は、現在の中国會計でも「借貸記帳法」という場合にそのまま用いられているが、清朝末期の当時は馴染みのない言葉であったためか、「借貸即付與收然不能竟改付與收已見後論不再贅釋」(借貸とはすなわち付と収であるが、結局、付と収に改めることはできない。後論を参照のこと。あえて余計な説明はしない)との注記が文中に加えられている。「後論」とは、第三章の「借貸の理」の解説部分を指すと考えられる。個々の勘定科目の名称が『修正銀行簿記學』によってどう伝播されたのかの考察は他稿に譲るが、本稿では『修正銀行簿記學』と『銀行簿記學』の「勘定科目表」を比較し、その異同について明らかにしておく。

3.2. 勘定科目表

3.2.1 三勘定に区分された勘定科目

『修正銀行簿記學』では、銀行の事業について

以下の通り資金の集散に着目し、負債に「賠償」、資産に「報酬」を対応させながら、資産、負債、損益の三勘定に区分し、勘定科目について詳細な説明を行っている。

然り而して銀行の事業たる、一方に於て供給ある處に金錢を集むるを以て、是に負債を生じ、又他の一方に於て、之れを需要ある處に散するを以て、是に資産を生じ、其負債に對しては賠償を要し、資産に對しては、報酬を得るの順序とす、されば、銀行事業を整理する勘定科目は之れを大別して、資産負債及損益の三勘定となすを得べし、尙左に之れを細別せん(『修正銀行簿記學』4頁)

この説明を『銀行簿記學』も以下の通り完全に借用している。取引の分類と勘定科目について、謝霖と孟森は『修正銀行簿記學』の論述に全面的に依拠し、若干の用語の説明を除き、独自の見解を盛り込んでいないことが分かる。

就銀行事業而言。一面從供給處集合金錢。是生負債。一面就需要之處散布金錢。是生資産。對於負債。可索償還。對於資産。可得酬報。此一定之理。故以款目整理銀行之事業。資産負債及損益。爲三大宗細別如左(『銀行簿記學』4頁)

なお、同章末尾には「勘定科目表」が表示されている。以上の諸点に鑑みれば、『銀行簿記學』は『修正銀行簿記學』の勘定科目体系を完全に継受しているといえよう。要するに、謝霖と孟森は、銀行実務への応用を目的とする日本の文献に依拠しながら、間接的に西洋の複式簿記の方法を清朝末期に伝播したことになる。参考までに、以下では「勘定科目表」を負債(図表2)、資産(図表3)、損益(図表4)に分け、縦書きを横書きに改めて『修正銀行簿記學』と『銀行簿記學』の勘定科目を対比する。

ちなみに、現在の中国で「當座預金」に対応する漢語は「活期存款」(要求払い預金)であるが、『銀行簿記學』では「無定期存款」と訳されてい

図表2 負債に関する勘定科目表

『修正銀行簿記學』(27-28 頁)		『銀行簿記學』(22 頁)	
諸預り金	定期預金	諸存款	定期存款
	當座預金		無定期存款
	小口當座		特別無定期存款
	通知預金		通知存款
	別段預金		暫存款
	預金手形		存款票
爲替上の負債	仕拂送金爲替手形	滙兌上之負債	滙來滙票
	他店		他店
	支店		支店
資金補充上の負債	借入金	活本	借入金
株主に對する負債	資本金	對於股東之負債	資本金
	積立金		公積 (※1)
	前半季繰越金		前季滾結
	配當金		分紅
	仕拂未済配當金		未付分紅

図表3 資産に関する勘定科目表

『修正銀行簿記學』(28-29 頁)		『銀行簿記學』(23 頁)	
貸出金	貸付金	貸出金	貸付金
	割引手形		貼現票
	質入証券		棧單押款
	荷付爲替手形		滙來貨價票
	當座預金貸越		無定期存款透用
爲替上の資産	他店	滙兌上之資産	他店
	支店		支店
預け金		存款	
株主に對する資産	拂込未済資本金	對於股東之資産	未入資本金
所有物	地所家屋	所有物	土地房屋
	諸公債證書		諸公債證書
	諸株券		諸股票
	諸社債券		諸社債券
	地金銀		地金銀
	什器		什器
金銀		金銀	

る。「資金補充上の負債」は「活本」と訳されているが、「活」とは自由に動かせるの意味であり、「本」は資本のことを指す。(※1)の「公積」は原本の図で「公債」になっているが、本文では「公積」である。おそらく誤植であろう。その他の『修正銀行簿記學』の科目名称についても、漢語にうまく相応する訳語が付けられている。

「當座預金貸越」は、現在の漢語で「活期存款

账户透支」(要求払い預金勘定貸越)と訳するのが一般的であるが、ここでは「無定期存款透用」の訳語が当てられている。「透用」とは、通り越して使うという意味である。「預金」と同様に「預け金」にも「存款」の訳語が当てられているが、「存」には「預ける」「預かる」の両方の意味がある。負債に関する勘定科目と同様、漢語に相応する訳語が考案されている。

図表 4 損益に関する勘定科目表

『修正銀行簿記學』(29-30 頁)	『銀行簿記學』(24 頁)
利足	利息
割引料	貼現費
手数料	費手金
(※ 2)	(※ 3)
公債證書賣買損益	公債證書賣買損益
地金銀賣買損益	地金銀賣買損益
公債證書の籤損益	籤還公債證書損益
交換打歩	兌差
雑益	雑益
諸税	諸税
給料	薪金
旅費	旅費
雑費	雑費
諸損	諸損

図表 4 の (※ 2) の箇所については、『修正銀行簿記學』の勘定科目の表中に相当するものはないが、本文中には「公債利足」の記載がある。(※ 3) の箇所については、1992 年復刻版に記載はないものの、2009 年復刻版では「公債利息」の勘定科目が加筆されている。「交換打歩」に当てられた「兌差」は、「兌換差異」のことと解される。

以上の勘定科目と内容について同章には詳細な記述があるが、『銀行簿記學』の記述との比較考察は紙面の関係上、他稿に譲ることとする。

4. 借貸の理と銀行簿記の特質

4.1. 借貸の理

本章で扱う「借貸の理」と「銀行簿記の特質」は、銀行簿記学の理論の伝播が最もよく表れている箇所である。その記述は、後述の通り『修正銀行簿記學』をそのまま翻訳した部分もある一方、謝霖と孟森の独自の見解が述べられている箇所も少なくない。まず『修正銀行簿記學』では、「借貸の理」について以下のように記述されている。

前章説くところの如く、各種の取引を其性質によりて區別し、之れを整理するに、終始一貫而

も動かすべからざる原則の存するあり、一たび之に精通すれば如何に錯雜せる取引と雖も、快刀亂麻を絶つる思あり、是れ即借貸の理にして學者の深く研究を要するところのものたり、乞ふ其概略を述べん（『修正銀行簿記學』31 頁）

前半の記述は、『應用銀行簿記學』では「前章説くところの如く取引の性質によりて區別したる各科目を整理するに、終始一貫而も動かすべからざる原則の存するあり」と記述されていたが、『修正銀行簿記學』では若干の文言が改められている。そして『銀行簿記學』の該当箇所は、下記の通り『修正銀行簿記學』の記述内容に合わせている。

如前章所述。各種取引。從其性質以爲區別。於實行整理之時。尚有一始終一貫不可改移之原則。一經精通。雖如何錯雜之取引。皆如快刀之斬亂絲。是即借貸二字之理。學者所當極力研求者也。乞述其概略（『銀行簿記學』24-25 頁）

「取引」の用語をそのまま使用し、「借貸の理」は「借貸二字之理」となっているが、ほぼ『修正銀行簿記學』の記述に則して訳しているといえよう。ちなみに、『修正銀行簿記學』では、報告書

の第一に「貸借対照表」を掲げており³⁷⁾、『銀行簿記學』もこれに従って「貸借対照表」と記している³⁸⁾が、現在の中国では「**资产负债表**」(資産負債表)という。

「借貸の理」に続く記述は、「複式簿記の原則」である。この部分の記述内容は、『修正銀行簿記學』の根幹にあたる部分であり、以下のように記されている。

盖し複式簿記の原則とするところは、生ずるに必ず原因あり、失ふも亦必ず其原因あり、無より有を生ぜず、有は決して無たらず、一方に受くるところあれば他方に失ふところあり、一方に失ふところあれば他方に受くるところのものあり(『修正銀行簿記學』31頁)。

白丸の点「○」が文章全体に付されており、森川が『修正銀行簿記學』の重要な記述部分と位置付けていることは明かである。製版上の都合によるためか、『銀行簿記學』では、句号「。」と圈点の白丸「○」が混在しており、文の区切りを明示する箇所の初めの漢字には圈点を付けていない。このように、『修正銀行簿記學』と点の付け方に細かな差異があるものの、下記の通り相応する記述箇所にはおおよそ圈点が付されている。

盖複式簿記之原因。其存立也由其消失也。有者决不能無。無者决不能有此方所得即他方所失。他方所得即此方所失(『銀行簿記學』25頁)

なお、既述の「借貸の理」と同様に、『修正銀行簿記學』の本文上段の欄外には「複式簿記の原則」と明記されているが、『銀行簿記學』にはこのような欄外の脚注がない。「複式簿記の原則」の文言は、「複式簿記之原因。其存立」と訳し替えられている。とはいえ、記述内容を照らし合わせれば、森川が「複式簿記の原則」とする内容をほぼ踏襲した訳文であることは明かである。

また、「複式簿記の原則」には、以下の記述が続いているが、以下の通り森川はここに圈点ではなく、傍点(丶)を付している。

其受くるところのもの、及失ふところのものは、其實際の價值に甲乙あるやも知るべからずと雖も、必ず之れを同價值のものと看做し、五を受くれば五を出し、十を出せば十を得るものとし、常に兩々相對して一釐一毫の差違無しとするに在り、是れ所謂借貸の理にして(『修正銀行簿記學』31頁)

価値交換の關係に言及し、複式簿記の貸借平均の法則を説明する重要な記述である。森川は1896(明治29)年東京高等商業學校を出て三菱合資會社に入社したようであるが、そうすると、商法講習所の助教から三菱商業學校講師となり、三菱爲替店を経て母校の教授に復職した森島修太郎から何らかの影響を受けていた可能性がある。

ちなみに、森島は商法講習所の第1回卒業生であり、ホイットニー(William Cogswell Whitney)の日本における最初の生徒³⁹⁾とされている。森島がホイットニーを通じてフォルソム(Ezekiel Gilman Folsom)の簿記理論の影響を受けているのは自然であり、森島が1878(明治11)年に記した『簿記學例題』はフォルソムをはじめ日本人が紹介した文献として知られている⁴⁰⁾。また、1891(明治24)年7月に刊行された『簿記學』では、貸借仕訳の定則を「凡テ受ラレタルモノハ借トナリ」「凡テ渡サレタルモノハ貸トナル⁴¹⁾」と明記する他、価値交換の理論について詳細な解説を記している。

森島が「Folsomの簿記書を底本とし、自身の考えに基づく新たな説明を提示⁴²⁾」したとするならば、森川の文献は、フォルソムだけでなく森島の見解をも取り込んだことになる。

なお、『銀行簿記學』では傍点が白丸の点になっているが、以下の通り、「複式簿記の原則」の重要な記述に対応する部分にすべて点が付されている。

一得一失之間價值高下實際雖不可必然必視為同價所受者五所出者五所出者十所受者十常相對待無毫釐之差是即所謂借貸之理(『銀行簿記學』)

25 頁)

前半部分の「實際雖不可必然必視為同價」は意味がわかりにくく、2009 年復刻版では「不可必」が「可不必」となっている。しかし、前後の文脈からすると「必」は同音である「避」の誤植ではなかろうか。そう解すると、「得ると失うの間、価値の上下は実際に避けられないとはいえ、同じ価値と見做さねばならない」という意味になる。後半部分は原文に沿った訳文になっており、総じて『修正銀行簿記學』の記述をそのまま反映したものになっている。

現状では、これが西洋式の複式簿記における価値交換の理論を漢語で解説した最も古い記述と考えられる。なお、この記述だけから複式簿記の仕組みを理解することは容易でないためか、森川は続けて「注意すべき点」として2つの項目を指摘して解説しており、『銀行簿記學』もそれを記述している。

4.2. 「主とするもの」について

まず最初の項目は「主とするもの」についてであり、『修正銀行簿記學』の記述は以下の通りであるが、『應用銀行簿記學』の記述とほとんど変わらず一貫している。

其借貸と云へるは主とするものに對して云へる語なり、されば、主とすべきもの定まりて而して、後始めて或は之れを借と云ひ、或は之れを貸と云ふを得べく、主とすべきものなくして借貸なる語の生ずべき理なしと知るべし（『修正銀行簿記學』 31-32 頁）

これに対して、『銀行簿記學』も以下の通り趣旨を損なうことなく訳している。

其借貸云者。對於一主者而言之也必定其孰爲主者而後或謂之借或謂之貸苟無主者即借貸無由而生盖可知矣（『銀行簿記學』 25 頁）

ここで「主とすべきもの」がどのように定まる

のかについて、森川はそれが帳簿の性質によって異なるとし、「元帳に在りては元帳を組成せる勘定科目、金銭出納帳に在りては金銭、日記帳（日記仕譯帳）に在りては各勘定科目」として3つの要素を示している。その上で日記帳につき、「例へば甲なる商人（營業主即ち帳簿の持主）が百圓の商品を乙なる商人に掛賣したり」と想定し、以下の通り日記仕譯帳における仕訳を例示する。

借方 乙商 y 100. — 貸方 商品 y 100. —

その上で、

即借に於ては乙商を主とし貸に於ては商品を主とす、斯の如く主とすべきもの定まり、其主とすべきものが營業主（即ち帳簿の持主）に對する借を「借」と云ひ、營業主に對する貸を「貸」と云ふに外ならず（『修正銀行簿記學』 32-33 頁）

と解説している。

この3つの要素について、『銀行簿記學』（25 頁）も「歸戸帳即以所立之戸之款目」（元帳については元帳を作り上げる勘定科目をもって）、「金銭出納帳即以金銭」（金銭出納帳については金銭をもって）、「日記帳或日記細目帳即以各帳之目」（日記帳あるいは日記細目帳については各帳簿の科目をもって）と各々訳して『修正銀行簿記學』の解説を踏襲している。

ここで日記帳については、漢語で誤解が生じないように、「細目日文謂之仕譯、又謂之内譯、即計開二字之義」（「細目」とは日本語でこれを「仕訳」、又は「内訳」といい、それはすなわち「計開」（帳票）の二文字の意味）と注記している。その上で、原文と同じ事例「例如甲商即營業主。亦即執帳簿者。以百圓之商品。賒與乙商。其日記細目帳。記入之借貸如左。」（例えば甲商が營業主ならば帳簿の担当者である。百圓の商品を乙商に掛け売りすれば、その日記細目帳で貸借を次のように記入する）を用いて、『修正銀行簿記學』と全く同様に

借方 乙商 100, __ 貸方 商品 100, __

と仕訳を記載し、解説部分を以下の様に訳している。

即借方以乙商爲主。貸方以商品爲主。如此則主者既定。其所以爲主者乃中間有一營業主即執帳簿者其所借出之方謂之借方其所貸入之方謂之貸方（『銀行簿記學』26頁）

大意は「つまり借方は乙商を主とし、貸方は商品を主とする。このように主というものは定まっている。その主たるゆえんは、中間に一營業主すなわち帳簿の担当者がいるからである。その借り出した方は借方といい、その貸し付けた方は貸方という」となる。

後半部分は原文に則しているとは言えないが、西洋式の複式簿記における価値交換の理論を、營業主すなわち帳簿の担当者を中間に置くといった工夫を施し、それによって初心者にも理解しやすいように訳文を考案したものと推測される。なお、後半部分の圈点は、『修正銀行簿記學』では付記されていない。『銀行簿記學』の記述に付記されているのは、謝霖と孟森がこの部分を特に重要な記述と考えた可能性がある。

ところで、「中間に一營業主すなわち帳簿の担当者がいる」という記述は、どの文献を参考にしたものであろうか。『修正銀行簿記學』の「例へば甲なる商人（營業主即ち帳簿の持主）が百圓の商品を乙なる商人に掛賣したり」の記述は、『應用銀行簿記學』の初版が発行された1898（明治31）年11月から変更がなく、その前年8月に同文館から発行された佐野善作の『商業簿記教科書』には「金錢と商品との二者を人類と見做し吾營業者たるもの其中間に立ち現金なる人より壹千圓の價を借受け之を商品なる人に貸し渡したりと見るべし⁴³⁾」との記述がある。この点に関し『銀行簿記學』には何ら記述はないが、謝霖と孟森がこの文献を参考にしたのではなかろうか。

いずれにせよ、「複式簿記の原則」と同様、これらの記述が、アラビア数字で横書きの仕訳を紹

介した最も古い漢語の文献といえよう。続けて『修正銀行簿記學』では、簿記学上の借貸は一般的な借貸と意味が異なるものではない、との解説が以下の通り記されている。

簿記學上所謂借貸なるものは、普通所謂借貸なるものと異りたる意を有するにあらず、前例甲なる商人が乙なる商人に金百圓の商品を掛賣したる場合に於て、乙なる商人を主として云ふときは、乙商は甲なる商人に金百圓を借りたるものにして、商品を主として云ふときは商品は甲なる商人に百圓を貸したるに過ぎず（『修正銀行簿記學』33頁）

この部分は『應用銀行簿記學』初版本から記述は変わっておらず、「借貸の理」に関する森川の見解をまとめたものと思われる。ちなみに、『應用銀行簿記學』の初版が世に出た1898（明治31）年に先行し、1895（明治28）年4月に下野直太郎が自ら発行した『簿記精理』には以下の記述がある。

左れば通俗貸借なる語に依りて了解する處とは全く別義を意味する如く見ゆ然れとも貸借なる語を適用したるは決して偶然に非ざるなり本來貸借は人の働きなり然るに今事物をも人の如く見立て、此働きを附與したるなり今某甲に貸を生ずれば某甲は借方即ち負債主の地位に立つべきなり又某甲に借を生ずれば某甲は貸方即ち債主の地位に立つべきなり⁴⁴⁾

これは「借方」という用語が、「自らが借主になっているのではなく、勘定の相手方が借主の状態にあると説明して、貸借簿記の方法を説く⁴⁵⁾」ものである。また、同年9月に出版された大原講述の『原理應用日本簿記法解式第壹號』の「第二編 銀行簿記」でも、「貸借」に関して以下の記述が確認できる。

價值交換ノ關係ニ起因スルモノニシテ諸般取引セル勘定ハ人名ト物品ト事柄トラ問ハス總テ之

ニ貸主借主ノ名稱ヲ附シ以テ計算ノ原因ト結果トヲ指定スルノ基礎ナレハ此價值ニ伴フ貸借ノ二語ヲ左ノ定則ニ依リ應用スルヲ務ムルコト最も緊要ナリトス⁴⁶⁾

大原は以上に続けて、「總テ受ケタルモノノ價ハ借主トナル」、「總テ授ケタルモノノ價ハ貸主トナル」という価値交換の關係に伴う貸借の定則を明示している⁴⁷⁾。なお、大原は「借貸」ではなく「貸借」の用語を使用する点で、森川と異なっている。この点について、『應用銀行簿記學』が世に出る5カ月前に出版された勝村榮之助の『銀行會社簿記學原理』では、「普通一般ニ使用スル處ノ貸借ノ語ハ對人ノ勘定ニノミ之ヲ適用ス可シト雖モ簿記學ニ於ケル借貸ナル語ハ更ニ其範圍ヲ廣ク使用スルモノニシテ萬般ノ勘定ノ授受ニ應用ス可シ⁴⁸⁾」と記されている。大原と異なり、森川が「借貸」の用語を使用する点については、留意する必要がある。

以上の諸点に鑑みると、森川の「借貸の理」は森島の他に、下野、大原、佐野、勝村等の多くの研究者の見解を参考にして考案された可能性も否定できないが、森川の文献からはこれらの研究者との關係を明示する記述は見当たらず、自らの見解として以下の通り「借貸の定義」を示している。

借とは主とすべきもの、營業主（即ち帳簿の持主）に對して借りたる値を謂ひ
貸とは主とすべきもの、營業主（即ち帳簿の持主）に對して貸したる値を謂ふ（『修正銀行簿記學』33頁）

謝霖と孟森は、定義を記述したこの箇所では注記を付すことなく、以下の通り簡潔に訳している。

借者所借於營業主之値也
貸者所貸之於營業主之値也（『銀行簿記學』26頁）

しかしながら、これだけでは初学者にとって理解が容易でないことから、本章第5節で述べるよ

うに『銀行簿記學』第參章の締め括りにかなり詳しい注記を行っている。

4.3. 「金銭」について

森川は、「借貸の理」を「初學者の誤解し易きもの⁴⁹⁾」と指摘し、以下の通り解説する。なお、『應用銀行簿記學』の初版本から11版の『修正銀行簿記學』に至るまで、この部分の記述は一貫している。

蓋し金銭なるものは、常に一方の相手たるべきものなるを以て、初學者或は之れを一種特別のものなりと思惟するによると雖も、商品と謂ひ、金銭と謂ひ、其他何たるを問はず何れも是れ値にして、其之を受くるに至れるは一方に出せしところの値ありしによるものなれば（『修正銀行簿記學』33-34頁）

この記述に対し『銀行簿記學』では原文に沿った訳⁵⁰⁾を付けているが、続けて独自の解説を加えている。まず『修正銀行簿記學』で続きの記述を確認する。

營業主の有する金銭は、營業主に對し負債主即借の位置に立てること、恰も金銭なる値を出して受けたる商品が營業主に對して負債主即借の位置に在るが如く、簿記學上にては如何なるものも一視同仁、決して特種のものと思ふべきを原則とす（『修正銀行簿記學』34頁）

これに対して、『銀行簿記學』の記述は以下の通りである。

故營業主所有之金銭其可計之數即金銭之値也此值孰與之即金銭與之此金銭遂爲營業者之債主而營業主自立於借之地位矣或其所有之商品亦以數計即亦爲商品之值營業者既受此值又以商品爲債主而立於借之地位此在簿記學上。無論如何皆同等視之以決不區分爲原則（『銀行簿記學』27頁）

大意は、「ゆえに營業主が有するところの金銭、

その計りうる数はすなわち金銭の値である。この値、いずれがこれを与えるかという、金銭がこれを与える。ここで金銭は営業主の債権者となり、そして営業主はおのずと借の地位に立つのである。あるいは、その有するところの商品もまた数をもって計算し、商品の値とする。営業主はこの値を受けるだけでなく、商品をもって債権者とし、借の地位に立つ。ここに簿記学上、いかなるものもみなこれを同等にみて決して区分しないことを原則とする」となる。

冒頭の「營業主所有之金銭」, 末尾の「簿記學上。無論如何皆同等視之以決不區分爲原則」の部分、『修正銀行簿記學』の記述に沿った訳であるが、その他の部分は、謝霖と孟森の独自の見解が反映されている。ここで謝霖と孟森は、いかなる文献の理論を参考にしたのであろうか。

ちなみに、既述の通り、下野は「事物をも人の如く見立て、此働きを附與したるなり」と説き、大原は「人名ト物品ト事柄トヲ問ハス總テ之ニ貸主借主ノ名稱ヲ附シ」と述べ、佐野は「金銭と商品との二者を人類と見做し」と記すなど、当時の文献ではいずれも擬人説の影響を受けた説明をしている。

謝霖と孟森は、「正則」という簿記の会のメンバーであり、これらの研究者の文献を読み込む機会があったはずである。だとすれば、謝霖と孟森が擬人説⁵¹⁾の影響を受けた可能性はある。そして、森川も『修正銀行簿記學』の中で、以下の通り「人間視 personify」という文言を明示しており、擬人説の立場から説明をしている。

されは之れを誤解せざらんとせば、其金銭たると商品たると、將又如何に特種の如く見ゆるものと雖も、之れを人間視 personify するを要す、庶幾くは誤解を免かるゝを得ん（『修正銀行簿記學』34頁）

これに対して、『銀行簿記學』では、「されは之れを誤解せざらんとせば」の記述に対し、「欲其不生誤解。正須領會此理⁵²⁾」（誤解を生じないことが必要であり、正しくこの理を把握しなければ

ならない）と訳した上で、続きの記述に対しては訳文ではなく、以下の通り自らの見解でもって置き替えている。

任常人之所歧視如商品如金銭若大有不相伴者以出世法觀之則本來無別直無由析而二之也（『銀行簿記學』27頁）

大意は「たとえ一般人が偏見を抱くところの例えば商品、金銭が、もし大いに相伴わないとしても、出世法（小林注：俗世間の煩惱にとらわれない法理）でもってこれを見る、すなわち、もともと差はなく、全く理由なく分かれて2つになっていると考えるのである」となる。

森川の『修正銀行簿記學』が様々な研究者の見解を取り込んだものであるならば、それを底本にした『銀行簿記學』も、結果的に様々な研究者の見解を取り込んだことになる。謝霖と孟森がどのような研究者の文献や学説を参考にしたのかを推論することも興味深い論点であるが、以下では森川の著作と『銀行簿記學』の比較だけに絞り、他の文献との比較検討は他稿に譲ることとする。

4.4. 銀行簿記の特質

森川は『修正銀行簿記學』の第3章で、銀行簿記の特殊性について要約している。文章全体に圈点が付されており、現金式仕訳法を解説する重要な記述である。一般に日記帳ないし当座帳といえは取引の歴史記録のことを指しており、仕訳帳と区別しているが、銀行簿記では伝統的に「仕訳日記帳」ないし「現金式日次総合仕訳帳」のことを「日記帳」と称している⁵³⁾。森川も、銀行簿記における「日記帳」の特殊性に着目し、以下の通り金銭出納帳の性質について言及している。

然り而して銀行簿記に於ては其取扱ふところのもの、主として金銭なるのみならず、特に之れに特種の取扱を與へ、日記帳の如きも金銭出納帳の性質を附與し、金銭を主として記帳の法を司るを以て初學者の誤解をして益深からしむることあり、されど是れ金銭が特種の性質を有す

るより、之れに特種の取扱を與ふるにあらず
 (『修正銀行簿記學』34頁)

『銀行簿記學』も、以上の記述に沿った訳を付けている⁵⁴⁾。

さらに森川は、金銭出納帳の性質を有する日記帳の特徴に続けて、非現金取引の擬制による現金取引化を銀行簿記の特質とし、以下のようにまとめている。

其現金に關せざるもの、例へば單に勘定の振替に止まるが如き取引にても、一方の相手たるべきものは、之を金銭と假定し、如何なる取引も一方には必ず金銭の伴ふありとして取扱ふを原則とす、是れ即銀行簿記の特質にして (『修正銀行簿記學』34-35頁)

この部分に対して、『銀行簿記學』では以下のように訳文が付けられている。

其不關現金止用推收之帳亦於對面一方假定金銭之數故無論何種取引一方必伴以金銭此爲一定之原則是故銀行簿記之特質 (『銀行簿記學』28頁)

文意は「その現金に関らない振替だけの記帳もまた、相手側において金銭の数を假定する。ゆえにどんな取引であるかを問わず、一方は必ず金銭を伴わせるようにし、これを一定の原則とする。これは銀行簿記ゆえの特質である」となるが、明確に擬制による現金取引化が示されている。これらの点に鑑みると、銀行簿記の特質に関する『修正銀行簿記學』の本旨は、『銀行簿記學』にほぼ反映されているといえよう。

両方の記述内容を比較すると、謝霖と孟森は、基本的に『修正銀行簿記學』に依拠して『銀行簿記學』の「借貸の理と銀行簿記の特質」を書き上げたことは明らかである。とはいえ、『修正銀行簿記學』は、冒頭の「緒言」のところで述べる通り「一聯の取引を假想して、その起因より決算報告に及び、利益配當計算に終わる」著書を目指して書き上げられたものであり、西洋式の複式記帳

法に通じていない清朝末期の人々にとって、初めて目にする銀行簿記の原理は容易に理解できるものではない。

かかる点に配慮してか、『銀行簿記學』の「借貸の理と銀行簿記の特質」の章末には、『修正銀行簿記學』にはない多くの仕訳と解説が章末に注記として盛り込まれている。そこで次節では、その注記の内容について掘り下げることとする。

4.5. 謝霖と孟森の見解

『銀行簿記學』では、「借貸の理」の解説の後、銀行簿記の特質の前に長文の注記を付している⁵⁵⁾。その書き出しは「此論借貸之理。簿記學中借方貸方之名。直萬不可易⁵⁶⁾」ではじまり、簿記学における借方、貸方という名称の理解が全く容易でないことを率直に述べている。

これに続けて、「向見有人譯家庭簿記。改借方爲收款。改貸方爲付款者。是固未解文理者也⁵⁷⁾」と記しているのも興味深い。「向見有人」(知り合った人)がどういう人物なのか判明しないが、「譯家庭簿記」(家計簿記を訳した)とあり、「改借方爲收款。改貸方爲付款者」すなわち、借方を「收款」、貸方を「付款」と漢語に訳したところ、「是固未解文理者也」(これではもとより文脈が分からない)と記されている。

さらに「吾國文字之差貸與資相混其義遂與借字無別⁵⁸⁾」とあり、古来、中国では字形の類似した「貸」と「資」の文字が混じり合い、「貸」の字義において「貸し」と「借り」が区別されなかったことも混乱の要因として紹介されている。

こういった日本と中国の漢字の違い等を指摘した上で、「借者必有歸還之義務貸者必有索還之權利彼收字中無必付之關係付字中無必收之關係⁵⁹⁾」すなわち、「借は必ず返還する義務であり、貸は必ず返還を求める権利である。収の文字の中に必付(支払うべき)の関係はない、付の文字の中に必収(もらうべき)の関係はない」とする。そして、銀行簿記の特質を述べた後に、以下の注解を記している。

銀行之於金錢猶商業之於商品商業之營業者以金

錢之值易得商品猶銀行之營業者以存戸之值招徠
 金錢所得者為商品則商品為營業者之所貸而居借
 方金錢為營業者之所借而居貸方所徠者為金錢則
 金錢為營業者之所貸而居借方（『銀行簿記學』
 28-29頁）。

「銀行の金銭に対する関係は、商業の商品に対する関係と同じであり、商業の営業者が金銭の価値によって商品を手に入れるのは、銀行の営業者が『存戸』（銀行預金の口座）の価値によって金銭を呼び集めるのと同じである。得たものが商品ならば、商品は営業主が貸すもので借方にくる。金銭は営業主が借りたもので貸方にくる。集めたものが金銭ならば、金銭は営業主が貸したもので借方にくる。」文意は以上の通りであるが、この解説だと簿記の初学者には分かりにくいいためか、『銀行簿記學』では3章の末に仕訳例を付記している。

この仕訳例は『修正銀行簿記學』に記載がないものの、その内容を引き継ぎながらより実践的な項目を盛り込んで増訂した『銀行簿記教科書』の中に類似の仕訳例がある。同書の出版は1906（明治39）年4月であり、孟森が東京の集賢館の某部屋で『銀行簿記學』の序文を執筆したのが同年

10月なので、謝霖と孟森は『銀行簿記教科書』で加筆された仕訳例を読み込んだ可能性が高い。あくまでも推測であるが、謝霖と孟森が『銀行簿記學』の執筆中、「借貸の理と銀行簿記の特質」の解説を思案する間に『銀行簿記教科書』が出版され、これを参考にしながら『修正銀行簿記學』にはない仕訳例を考案して『銀行簿記學』に加筆したのではなかろうか。『銀行簿記教科書』の当該仕訳⁶⁰⁾は3例あるが、各々『銀行簿記學』の仕訳と対比すると以下の通りとなる。

まず図表5であるが、これは仕訳例一の対比である。金額については、いずれも500圓になっている。「當座預金」が『銀行簿記學』では「定期存款」(定期預金)に変わっている。『銀行簿記學』の仕訳例では理論的な説明は記載されず、「銀行簿記法は、現金を省略し貸借の記号を反対にする」というように仕訳のやり方が簡潔に述べられている。

次の図表6は、仕訳例二を対比したものである。金額については、『銀行簿記教科書』では10,000圓であるのに対し、『銀行簿記學』では1,000圓とひと桁小さくなっているものの、科目は同じになっている。仕訳例一と同様に、一般の商業簿記と銀行簿記の違いを対比する形になっているが、

図表5 ※原典は縦書きのため、表中「左」は「下」の意となる。図表6、7も同じ。

『銀行簿記教科書』仕訳例（51-52頁）		『銀行簿記學』仕訳例（29-30頁）	
例一、當座預金として現金五百圓を受取る。 本例に於ては、「當座預金」は、銀行營業主に對して貸の地位に立ち、「現金」は借の地位に立つを以て、其仕譯は左の方法によりて、日記帳に記帳するを通常の方法とす。		照普通商業記法。設如收定期存款五百圓。 (小林訳：一般商業の記帳法により、定期預金五百圓を受け入れるとする。)	
借方 現金 ¥500圓	貸方 當座預金 ¥500圓	借方 金銀 500,-	貸方 定期存款 500,-
銀行簿記の原則も亦之に異なるところなきも、此記帳を簡にせんがため、仕譯の手續の一部を略し、左の如く日記帳に記帳す。		銀行簿記法。省去金銀而反貸借之記號。 (小林訳：銀行簿記法は、現金を省略し貸借の記号を反対にする。)	
借方 當座預金 ¥500圓		借方 定期存款 500,-	
即「現金」は銀行營業主に對して五百圓を借りたり、之に對し、「當座預金」は銀行營業主に對して五百圓を貸したることを意味するものにして、「當座預金」なる科目は、營業主に對して借りたる位地（原文のまま）に在るにあらず、借主たる「現金」なるもの、相手方たるを示す摘要に外ならずと知るべし。		(解説なし)	

図表 6

『銀行簿記教科書』仕訳例 (52-53 頁)	『銀行簿記學』仕訳例 (30 頁)
例二、金壹萬圓を貸付け現金を拂渡せり。 本例に於ては「貸付金」は銀行營業主に對して借の地位に立ち、「現金」は貸の地位に立つを以て、其仕譯は左の方法によりて日記帳に記帳するを通常とす。	照普通商業記法。設如貸付金一千圓。 (小林訳：一般商業の記帳法により、一千圓を現金で貸し付けるとする。)
借方 貸方 貸付金 ¥10,000 [㊦] 現金 ¥10,000 [㊦]	借方 貸方 貸付金 1,000,- 金銀 1,000,-
然るに銀行簿記に於ける日記帳記帳の方法は左の如く簡略なり。	銀行簿記法。省去金銀而反貸借之記號。 (小林訳：銀行簿記法は、現金を省略し貸借の記号を反対にする。)
貸方 貸付金 ¥10,000 [㊦]	貸方 貸付金 1,000,-
即貸方に在る壹萬圓は、「現金」が銀行營業主に對して貸したることを示し、「貸付金」なる科目は之に對する相手方の地位に在ることを示すに過ぎず。	(解説なし)

図表 7

『銀行簿記教科書』仕訳例 (53-54 頁)	『銀行簿記學』仕訳例 (30-31 頁)
例三、當座預金五百圓を定期預金に振替ふ。 本例は、當座預金は五百圓を銀行營業主に借り、定期預金は同額を貸したることを示し、普通の仕譯の方法左の如し。	照普通商業記法。設如付貸付金一千五百圓。 推收作無定期存款。 (小林訳：一般商業の記帳法により、貸付金として一千五百圓を払い出し、當座預金に振り替える。)
借方 貸方 當座預金 ¥500 [㊦] 定期預金 ¥500 [㊦]	(仕訳なし)
銀行簿記に於ては、單に振替に止まる場合にも、總ての取引を一樣に取扱はんがため、必ず一方の相手方は現金なりと假定せるを以て、少しく仕譯の方法を異にす、左の如し。	(解説なし)
借方 貸方 當座預金 ¥500 [㊦] 現金 ¥500 [㊦] 現金 ¥500 [㊦] 定期預金 ¥500 [㊦]	借方 貸方 貸付金 1,500,- 金銀 1,500,- 金銀 1,500,- 無定期存款 1,500,-
即「當座預金」より金五百圓を「現金」にて拂渡し、同額の「現金」を「定期預金」として受入れたるものと假定し、更に其仕譯を左の如く簡略にす。	銀行簿記法。省去金銀。反其貸借之記號而并之。 (小林訳：銀行簿記法は、現金を省略し、貸借の記号を反対にしてひとつにまとめる。)
借方 貸方 定期預金 ¥500 [㊦] 當座預金 ¥500 [㊦]	借方 貸方 無定期存款 1,500,- 貸付金 1,500,-
一方に於ては、「現金」は營業主に對して五百圓を借り、其相手方は「定期預金」たり、又他の一方に於ては、「現金」は營業主に對して五百圓を貸し、其相手方は「當座預金」なることを示すものとす。されど此の場合に於ては、「現金」の出入ありたるは單に假定に止まるを以て實際に出入ありたる場合と、假定に止まる場合とは之を區別記帳するの必要あり、第八章に於て説くところあらんとす。	(解説なし)

ここでも『銀行簿記學』では理論的な説明は記載されず、仕訳のやり方が簡潔に述べられているだけである。

最後に図表7は、仕訳例三を対比したものである。いずれも非現金取引の擬制による現金取引化を説明する仕訳であるが、科目の名称、金額ともに異なっている。この部分は、『銀行簿記教科書』以外の文献を参考にした可能性がある。

以上の諸点を鑑みると、『銀行簿記學』は『修正銀行簿記學』だけでなく、『銀行簿記教科書』も参考にした可能性が高いと推測される。『銀行簿記教科書』をどの程度依拠したのか、他にどのような文献を参照したのかについて掘り下げるには、他章の記述内容も比較検討する必要があるが、紙面の関係で他稿に譲ることとする。

結 語

本稿では、謝霖・孟森編著『銀行簿記學』で記述される「勘定科目表」と「借貸の理」に焦点を当て、森川の銀行簿記学の文献の該当箇所と比較し、本格的な西洋式の複式記帳法が清朝末期にどのように伝播したのかを考察した。考察の結果、『銀行簿記學』の「勘定科目表」と「借貸の理」の部分は、森川が記した『修正簿記學』が底本になっていること、『修正簿記學』だけでなくその内容を引き継いで実践的な項目を盛り込んだ『銀行簿記教科書』にも依拠している可能性が高いことが明らかになった。

さらに謝霖と孟森は、訳語の考案に苦心しながら、「借貸の理」を理解しやすくまとめるため、さまざまな研究者の文献を参照している可能性も浮かび上がってきた。『銀行簿記學』は、基本的に森川の文献を底本とするものであるが、執筆の過程で多くの研究者の見解を参考にし、それを取り込んだ可能性がある。

しかしながら、本稿で明らかになったことは、あくまでも「勘定科目表」と「借貸の理」の箇所限定されたものにすぎない。残された課題については、本稿で行った文献の比較検討を他の項目についても実施し、その上で原圭南、米田喜作の

文献を含めた他の関連文献とも比較しながら漸次解明していく必要がある。

【注】

- 1) 邵藍蘭は「中国における初期の簿記書」『札幌学院大学経営論集 No. 3』(2011年3月, 49-54頁)の中で、『銀行簿記學』と著者の謝霖について詳細な紹介と考察を行っている。なお、2009年に立信會計出版社から復刻版(謝霖・孟森編著『銀行簿記學』立信會計出版社, 2009年12月)が刊行されており、現在のところ一般に入手可能なものはこれである(本稿では「2009年復刻版」と表記する)。本文は簡体字に改められており、憂慮すべきことに1992年復刻版(楊時展主編, 謝霖・孟森編著『中華會計思想寶庫2 銀行簿記學』中国財政經濟出版社, 同書には奥付がないが、楊時展が書いた「總序」(序文)に1992年3月と記されているので、本稿では「1992年復刻版」と表記する)で表記されていた圈点(○)が省略されている。また2009年復刻版には、「按語」(注解)を読みやすくするためか、1992年復刻版にはなかった句号「。」頓号「,」を加筆しているものの、「取引先」を「取引, 先」, 「手数料」を「手數, 料」とする等の誤記もある。これらの点を勘案し、本稿で『銀行簿記學』という場合は、原則的に1992年復刻版によるものとし、2009年復刻版は「前言」等を部分的に参照するにとどめた。
- 2) 謝霖と孟森の功績を日本でいち早く紹介したものに、津谷原弘訳、郭道揚著『中国會計發展史綱(下)』(文眞堂, 1990年1月, 436頁)がある。ここでは数行程度の簡単な記述しかないが、津谷は後に『中国會計史』(税務經理協會, 1998年5月)を著し、その中で謝霖と孟森の『銀行簿記學』を紹介するとともに、1992年復刻版から数頁の複写を掲載している(同書, 90頁, 93頁及び94頁)。以上の他、邵藍蘭は前掲1の他に「民国時期における日中會計の交流」『札幌学院大学経営論集 No. 5』(2013年3月, 33-34頁)でも謝霖と孟森の『銀行簿記學』に言及しており、王昱『現代中国の會計法規範と戰略』(同文館出版, 2018年, 156頁)と田中孝治「東亞同文書院と清代末の中國固有の簿記」『同文書院記念報 Vol. 26』(2018年3月, 76頁)においても、『銀行簿記學』の紹介がある。
- 3) さねとう・けいしゅう『増補中国人日本留学史』くろしお出版, 1981年10月, 32-33頁。
- 4) 楊早「清末民初為何扎堆留學日本」騰訊網2016年7月5日—來源「北京晚報(微博)」〈<https://cul.qq.com/a/20160705/018920.htm>〉2019年11月7日参照。同記事は「記者觀察2017年05期」87-89頁にも収録されている。
- 5) さねとう・けいしゅう, 前掲書3, 55-64頁。
- 6) 市川紀子「第2部 簿記教育のむかし, 第1章 簿記教育の淵源」上野清貴監修『簿記のススメ—人生を豊かにする知識』創成社, 2012年5月, 122頁。
- 7) 邵藍蘭は、「中国において近代(特に清末民初)の會計史研究が非常に欠落しており、(中略)重大な歴史的事実もしくは歴史的事件は、日本はもちろん中国においても、従来までほとんど知られてこなかった」点を指摘している(邵, 前掲1, 49頁)。そして、『銀行簿記學』は「中国人がはじ

- めて目にしたいいわゆる「西洋式」、少なくとも形式的に、文字の横書き、アラビア数字と西暦の使用、そして何よりも「借方」・「貸方」という漢字の記帳記号を使用した西洋式複式簿記」と紹介し、「本書は中国において、体系的に西洋の debit/credit 複式記帳法を紹介した第2冊目の会計専門書となった」と評している(邵, 同上)。
- 8) 『連環帳譜』については、1992年に『銀行簿記学』と同時に復刻版が編纂されているが、必ずしも入手は容易でない。現在のところ2009年復刻版(本文だけでなく、著者名、書名、出版社名ともに繁体字で印刷)である蔡錫勇編著『連環帳譜』(立信會計出版社、2009年12月)が刊行されており、本稿執筆時においてこちらは比較的入手が容易である。『連環帳譜』は、前掲書2の津谷原弘『中国会計史』に簡潔な説明があり、資料として本文の合計8頁分が掲載されている。なお、『連環帳譜』のより詳しい内容と出版の意義については、邵(前掲1, 47-49頁)が参考になる。
 - 9) 劉福安「我国會計師制度的催化者－謝霖會計師」『上海會計1981年05期』1981年5月, 12頁。
 - 10) ちなみに、今西春秋が孟森の逝去を悼んで『東洋史研究』に寄稿した「孟森氏の訃」(『東洋史研究第四卷(2)』1938年12月, 158-160頁)には、碩学と言われた孟森を評価する次の記述がある。「今、私は孟氏の學問、経歴などに就いて記述し得る便宜を有たない。然し兎も角氏が近頃の碩学と謂はる可き人であつたことについては異論はあるまい。氏の專攻分野が清初史學にあつたことは言ふ迄もない。氏は清初史の専門(原文のまま)家として聞えたが、又典故の學に於いても蘊蓄稀に見る學者だつたといはれる」(同上, 158頁)。この追悼文には付記があり、今西が北京図書館勤務の黄仲という人物と知り合い、孟森の文献目録の作成を依頼したところ快諾を得たことが記されている。
 - 11) 末尾には「孟森先生著作目録」がまとめられており、『清朝前紀』一冊(十九年商務印書館出版)、『明元清系通紀』十六冊(廿四年北京大學出版)、『清初三大疑案考實』一冊(廿四年北京大學出版)等の他に、『法學通論』一冊(三年商務印書館出版)、『財政學』一冊(五年商務印書館出版)、『民法要義』五冊[日本梅謙次郎原著](二年商務印書館出版)、『統計概論』一冊[日本横山雅男原著](二年商務印書館出版)等が記されているが(同上, 160頁)、『銀行簿記学』は掲載されていない。
 - 12) 初版では、江蘇 孟森・謝霖編纂『商業銀行學彙編 第三冊 銀行簿記学』であつたと推測される。ちなみに1907年8月には、周廉儒編纂『商業銀行學彙編 第四冊 銀行法典』が商業編輯社から漢語で出版されており、同書の印刷所は東京の翔鸞社になっている。
 - 13) 森川鑑太郎については、名古屋大学法学研究科の『人事興信録』データベース<<http://jahis.law.nagoya-u.ac.jp/who/>>によると、1870(明治3)年6月12日に、岐阜県の森川東四郎の長男として生まれ、1896(明治29)年東京高等商業學校を出て三菱合資社に入り、同社庶務部副長の職に在りと記録されている。また、1912(大正元)年の第1回から1921(大正10)年の第15回まで三菱社内で「簿記講習会」が頻繁に行われたこと、その講習会の最初の幹事が三菱本社庶務部副長の森川鑑太郎であることが『三菱社史』に記されている。「複式簿記がやってきた!—三菱と簿記、そして日本郵船へ(巨大帳簿)」(<<https://www.lib.hit-u.ac.jp/service/tenji/k15/mitsubishi.html>> 2019年10月29日現在)。なお森川鑑太郎の没年月日は、国立国会図書館典拠データ検索・提供サービスによると、1917年10月8日(出典:朝日新聞)と記録されている(2019年10月29日現在)。
 - 14) 邵藍蘭は『銀行簿記学』の内容について、「本書は全くの翻訳ではなく、著者たちは明治期日本の簿記知識を広く吸収し、中国人がよりよく理解できるように、日本語用語の翻訳に苦心しながら、細心深く多くの注を付けるように工夫したものである。それゆえ、本書は『訳』とせず、『編纂』となっている」と考察している(邵, 前掲1, 52頁)。
 - 15) 記述の原文は次の通り。「吾簿記學不出於學校出於委巷里耳所遍設之簿記學會甚夥吾所廁之會名正則會長爲大坂高等商業教頭原主南君」(『銀行簿記学』跋6頁)。
 - 16) 謝霖が1918年に創設した中国最初の会計事務所の名称は「正則會計事務所」であるが、この名称は「正則」という簿記会に由来するものと推測される。
 - 17) 郭道揚「前言」謝霖・孟森編著『銀行簿記学』立信會計出版社、2009年12月、前言1頁。なお、「米田喜」となっているが、これはおそらく「作」の脱字であろう。謝霖と孟森の『銀行簿記学』に言及する際、郭道揚の前書きを参考にすることが多いためか、中国のネット上では、謝霖と孟森の『銀行簿記学』の紹介に付随して「米田喜作」を記述する際、多くは「米田喜」と一文字欠落した誤記の形で紹介されている。
 - 18) 森川鑑太郎『應用銀行簿記学』同文館、1898年11月。
 - 19) 森川鑑太郎『修正銀行簿記学 第十一版』同文館、1905年2月。
 - 20) 森川鑑太郎『銀行簿記教科書』同文館、1906年4月。
 - 21) 原本の入手は容易ではないが、米田喜著作、立花寛蔵関『実践銀行簿記法』(三省堂、1904年4月)、同修正2版(1907年6月)及び米田喜作撰、清奉天編譯處譯『實用銀行簿記』(1910年)が刊行されている。
 - 22) 津村怜花「和式帳合と複式簿記の輸入—江戸時代から明治時代にかけて」中野常男・清水泰洋編著『近代会計史入門』同文館出版、2014年10月、144頁。
 - 23) 久野秀男「日本近代会計成立史論考(1)」『学習院大学経済論集第10巻第4号』1974年3月、13頁。
 - 24) 中国の同文館は、1873年に出版界を創設しているが、それは中国で最も早い大学出版会とされている。また、東亜同文書院と清代末の簿記の関係については、田中(前掲2)が詳しい。
 - 25) 片野一郎『日本・銀行会計制度史』全国地方銀行協会、1976年2月、194頁。
 - 26) 『應用銀行簿記学』と『修正銀行簿記学』の目次は次の通り。第壹章 銀行の業務、第貳章 取引の分類并勘定科目(第一負債に属する勘定科目、第二資産に属する勘定科目、第三損益に属する勘定科目)、第參章 借貸の理并銀行簿記の特質、第四章 傳票、第五章 帳簿の組織(第一主簿、第二補助簿)、第六章 勘定報告書、第七章 利足計算法、第八章 實踐(第一取引、第二決算、第三報告、第四利益配當計

- 算), 帳簿。第七章の名称は「利息」ではなく、「利足」と表記されている。
- 27) 『銀行簿記学』の目次は次の通り。第壹章 銀行之業務, 第貳章 取引之分類并款項名目 (第一 屬於負債之款目, 第二 屬於資産之款目, 第三 屬於損益之款目), 第參章 借貸之理由并銀行簿記之性質, 第肆章 傳票, 第伍章 帳簿之組織 (第一 主簿, 第二 補助簿), 第六章 往來帳目報告書, 第七章 利息計算法, 第八章 實踐 (第一 取引, 第二 決算, 第三 報告, 第四 分配利益), 帳簿。
- 28) 詳しくは, 承_レ紅磊「孟森早期史事考略」『史林 2012 年第 5 期』2012 年 10 月, 124-136 頁。
- 29) 同上, 127 頁。
- 30) 邵, 前掲 1, 52 頁。
- 31) 『銀行簿記教科書』の目次は次の通り。第一章 總論 (第一 定義, 第二 効能), 第二章 銀行の業務, 第三章 銀行業務の分類並に勘定科目 (第一 負債に關する勘定科目, 第二 資産に屬する勘定科目, 第三 収益に關する勘定科目, 第四 支出に關する勘定科目, 第五 繰越損益に關する勘定科目), 第四章 勘定の起らざる銀行業務, 第五章 銀行業務の分擔法, 第六章 借貸の理并に銀行簿記の特質, 第七章 傳票, 第八章 帳簿の組織, 名稱, 分掌, 并に保存 (第一 帳簿の組織, 名稱, 第二 補助簿, 第三 帳簿の分掌, 第四 帳簿の保存) (小林注: 原本では「第二 帳簿の分掌, 第三 帳簿の保存」となっているが, 誤植であろう。), 第九章 諸報告書 (第一 諸勘定報告書, 第二 諸手形送達書, 第三 諸手形受入報告書 (小林注: 「報告」の誤植と解される), 第四 爲替尻勘定書), 第十章 切手手形の交換, 第十一章 決算の順序并に書類, 第十二章 主簿者の心得 (第一 ペン取扱上の注意, 第二 記帳上の注意, 第三 保存上の注意), 第十三章 例題。
- 32) 『應用銀行簿記学』では, 「極めて危険の業なるを」と記されている。
- 33) 原典では縦書きの表になっているが, 紙面の都合上, 横書きに構成した。
- 34) 「東籍」とは, 清朝末期の戊戌の政変で康有為とともに日本に亡命した梁啓超が日本の書物を紹介した文獻「東籍月旦」を指すと推測される。
- 35) 現在の中国では, 勘定科目のことを「會計科目」, 仕訳のことを「會計分录」という。
- 36) 「也」の字は活字が読みとりにくく, 2009 年復刻版で「中」になっているが, 「也」の活字の潰れによる読み誤りと思われる。
- 37) 森川, 前掲書 19, 168 頁。
- 38) 楊時展, 前掲書 1, 166 頁。
- 39) 西川孝治郎『日本簿記史談』同文館出版, 1971 年 1 月, 335 頁。なお, 「森島」を「森嶋」と表記した文献もあり, 検索時には注意を要する。
- 40) 同上。
- 41) 森島修太郎『簿記学』金港堂本店, 1891 年 7 月, 46 頁。同書の表紙の書名の下に「第壹」と書かれたものもあり, 西川は「彼は明治二十四年七月『簿記学 第一』を著した」としている (西川孝治郎, 前掲書 39)。なお, フォルサムの *The Logic of Accounts*; …… (1873) では, 1. All Value received is Debited 2. All Value given is Credited と記されている。
- 42) 津村怜花『『簿記法原理』および『簿記学 第一』にみる Folsom の簿記書の系譜一兼子 [1891] の再検討を中心として』『研究紀要第 62・63 合併号』2015 年 2 月, 49 頁。
- 43) 佐野善作『商業簿記教科書』同文館, 1897 年 8 月, 22 頁。
- 44) 下野直太郎『簿記精理』下野直太郎, 1895 年 4 月, 23-24 頁。
- 45) 小野正芳「下野直太郎と収支簿記」上野清貴編著『日本簿記学説の歴史探訪』創成社, 2019 年 3 月, 5 頁。
- 46) 大原信久講述『原理應用日本簿記法解式第壹號』簿記學研究會通信部, 1895 年 9 月, 45 頁。
- 47) 同上, 45-46 頁。
- 48) 勝村榮之助『銀行會社簿記學原理』萬松閣出版, 1898 年 6 月, 28-29 頁。
- 49) 森川, 前掲書 19, 33 頁。
- 50) 訳文は次の通り。「蓋金錢之爲物。常居他物之對面物値若干。即以金錢償之。故初學者意中常以此爲一種特別之物不知曰商品。曰金錢。不問彼此皆計值而言之耳其有所受必由他一方出此值以與之」(『銀行簿記学』26-27 頁)。
- 51) 太田哲三は, 勘定学説を人的説と物的説に分けた場合, 人的説はいわゆる擬人説 (Personification Theory) と呼ばれるものであり, これは, 「勘定を総て人になぞらえ, 企業に發生する一切の取引を擬人格間の貸借であるとして記帳整理するものが複式簿記」であるとした。太田哲三「勘定学説の研究」『一橋大學研究年報商學研究第 3 卷』(1959 年 3 月, 5 頁)。
- 52) 楊時展, 前掲書 1, 27 頁。
- 53) 久野, 前掲 23, 36 頁。
- 54) 訳文は次の通り。「獨是處理銀行簿記之法。不但以金錢爲主之帳有此特種辦法即日記帳中已成金錢出納帳之性質必用金錢爲主之記帳法記之初學有因此滋惑者。其實此非金錢有特性而生特種之辦法」(楊時展, 前掲書 1, 28 頁)。
- 55) 同上, 27-28 頁。
- 56) 同上, 27 頁。
- 57) 同上。
- 58) 同上。
- 59) 同上。1992 年復刻版では「必付之關係」, 「必收之關係」と記されているが, 文意からすると前者の「之」と後者の「必」に付けるべき圈点 (○) が脱落しているように解される。
- 60) 森川, 前掲書 20, 51-54 頁。

【参考文献】

- Folsom, E. G., *The Logic of Accounts; A New Exposition of the Theory and Practice of Double Entry Bookkeeping, Based in Value, As Being of Two Primary Classes, Commercial and Ideal*; …… New York, 1873.
- 森島脩太郎『簿記學例題』森島脩太郎, 1878 年 10 月。
- 森島脩太郎『簿記學』金港堂本店, 1891 年 7 月。
- 下野直太郎『簿記精理』下野直太郎, 1895 年 4 月。
- 大原信久講述『原理應用日本簿記法解式第壹號』簿記學研究會通信部, 1895 年 9 月。
- 佐野善作『商業簿記教科書』同文館, 1897 年 8 月。
- 勝村榮之助『銀行會社簿記學原理』萬松閣出版, 1898 年 6 月。

- 森川鑑太郎『應用銀行簿記學』同文館, 1898年11月。
- 森川鑑太郎『修正銀行簿記學 第十一版』同文館, 1905年2月。
- 森川鑑太郎『銀行簿記教科書』同文館, 1906年4月。
- 今西春秋「孟森氏の訃」『東洋史研究第四卷(2)』1938年12月, 158-160頁。
- 太田哲三「勘定学説の研究」『一橋大學研究年報商學研究第3巻』1959年3月, 1-28頁。
- 西川孝治郎『日本簿記史談』同文館出版, 1971年1月。
- 久野秀男「日本近代会計成立史論考(1)」『学習院大學經濟論集 第10巻第4号』1974年3月, 3-40頁。
- 片野一郎『日本・銀行會計制度史』全国地方銀行協會, 1976年2月。
- 刘福安「我国会计师制度的催化者—谢霖会计师」『上海會計 1981年05期』1981年5月, 12頁。
- さねとう・けいしゅう『増補中国人日本留学史』くろしお出版, 1981年10月。
- 西川孝治郎『文献解題 日本簿記学生成史』雄松堂書店, 1982年6月。
- 津谷原弘訳, 郭道揚著『中国會計發展史綱(下)』文眞堂, 1990年1月。
- 津谷原弘『中国會計史』税務經理協會, 1998年5月。
- 杨时展主編, 谢霖・孟森編著『中華會計思想寶庫2 銀行簿記學』中国財政經濟出版社, (總序) 1992年3月(繁体字復刻版)。
- 安藤英義『簿記會計の研究』中央經濟社, 2001年2月。
- 谢霖・孟森編著『銀行簿記學』立信會計出版社, 2009年12月(簡体字復刻版)。
- 蔡錫勇編著『連環帳譜』立信會計出版社, 2009年12月(繁体字復刻版)。
- 邵藍蘭「中国における初期の簿記書」『札幌学院大學經營論集 No. 3』2011年3月, 43-57頁。
- 市川紀子「第2部 簿記教育のむかし, 第1章 簿記教育の淵源」上野清貴監修『簿記のススメ—人生を豊かにする知識』創成社, 2012年5月, 109-123頁。
- 承紅磊「孟森早期史事考略」『史林 2012年第5期』2012年10月。
- 邵藍蘭「民国時期における日中會計の交流」『札幌学院大學經營論集 No. 5』2013年3月, 33-41頁。
- 津村怜花「和式帳合と複式簿記の輸入—江戸時代から明治時代にかけて」中野常男・清水泰洋編著『近代會計史入門』同文館出版, 2014年10月, 132-150頁。
- 津村怜花「『簿記法原理』および『簿記學 第一』にみる Folsom の簿記書の系譜—兼子[1891]の再検討を中心として—」『研究紀要第62・63合併号』2015年2月, 49-75頁。
- 王建忠, 柳士明主編『會計發展史 第四版』东北財政經濟出版社, 2016年8月。
- 王昱『現代中国の會計法規範と戰略』同文館出版, 2018年3月。
- 原俊雄「簿記教授法の再検討—導入段階での教育を中心に」『横浜經營研究第38巻第3・4号』2018年3月, 87-97頁。
- 田中孝治「東亜同文書院と清代末の中国固有の簿記」『同文書院記念報 Vol. 26』2018年3月, 51-84頁。
- 小野正芳「下野直太郎と収支簿記」上野清貴編著『日本簿記學說の歴史探訪』創成社, 2019年3月, 1-15頁。

(2019年11月8日 受稿)
(2019年12月4日 受理)